今年「茶山ポエム展」が３０回を迎えた。節目に当り、茶山ポエム展に深くかかわってこられた２名の方に寄稿していただきました。

**○「茶山ポエム絵画展三〇周年に寄せて」**

**元菅茶山記念館職員　矢田笑美子**

菅茶山顕彰会によって始められた「茶山ポエム絵画展」が３０周年を迎えられるとのこと、心よりお祝いを申し上げます。これも偏に顕彰会始め、同展をあたたかくご支援くださいました皆さまのご尽力の賜物と元関係者として感謝申し上げます。同展３０周年にあたり思い出話など寄稿させていただきます。

さて、同展は教育者、漢詩人である菅茶山を広く子どもたちに伝えていくという趣旨から茶山の漢詩の意訳を鑑賞してもらい、そのイメージを絵に描くことで、その詩と人物への理解を深めてもらうというものです。

その先駆けとなったのが、『まんが物語・神辺の歴史』（中山善照著、神辺を元気にする会一九八九　年出版）でした。

同書に菅茶山の漢詩が「夕日」「冬至」「蝶」などに改題されて、わかりやすい意訳と英訳で紹介され、子どもに限らず誰もが菅茶山の漢詩をとても身近に感じることができました。さらに、「茶山ポエム・イマジネーション・パーティー」と題して、茶山ポエム（意訳）を音楽とラップで楽しむミニコンサートも催され、当時としては斬新なとり組みとして話題になりました。そういったことにも発想を得て、一九九三年に茶山ポエム絵画展が始まりました。（その前年一九九二年に菅茶山記念館が開館し、同展とともに三〇周年の節目を迎える）既存の茶山ポエム（中山善照氏意訳）に加え、新たに漢詩の選定と意訳を当時の顕彰会役員で教育現場OBの方々が熱心にとり組んでおられました。

第1回当時は六〇〇点余りの出品点数でしたが、ワープロの時代でしたので、出品者情報はすべて手入力で、何をどこまで確認するかなど、作業にもかなり時間がかりました。その後、パソコンが導入されて平均的に約三〇〇〇点の出品数となって、作業にも要領を得て、現在のような形式で継続されています。

審査は、当初から児童絵画の審査に定評のあった故縄稚輝雄先生が務められ、何回展からとは思い出せませんが、顕彰会理事･神辺美術協会理事長であった故長谷川樹先生もご一緒に務められました。審査会のたびに「毎回この審査会は楽しみなんですよ」と、両先生ともに実に手際がよく、溌剌とした姿が思い出されます。

その後、審査は神辺美術協会に依頼することとなり、数年前からは審査会場を神辺文化会館小ホールに移すなど、年々手順も改善されながら現在に至っていると思います。作品の受付から審査、展示、表彰式、返却までの冬シーズンは本当に慌ただしい日々でしたが、展示会期中は、多くの子どもたちとその家族等で館内が一番活気に満ちていました。

これまで記念館展のほかに、ふくやま美術館展、県庁・市役所ロビー展、医院展、町並み格子戸展々の移動展で広くPRしてこられた労力にも頭が下がる思いです。同展のあゆみは顕彰会のホームページに紹介されているとおりですが、三〇周年といえば、すでに親子二代に亘って出品されている方も多くいらっしゃるのではないでしょうか。一層感慨深く感じられて、あらためて今日までのご支援に対し感謝の言葉しかありません。

**○「茶山ポエム絵画展黎明のころ」**

　　　　　**元菅茶山顕彰会事務局長 渡辺慧明**

このところ首を痛めて町内の整形外科医院に通っている。ある日、リハビリ室正面の椅子に額装された一点の絵が置かれていた。

「令和4年度ポエム絵画深安地区医院展」画題「雪の日」そして町内小学校1年生の名前が書かれていた。思わず近寄ってしみじみと眺めていると「この子をご存じなんですか？」案内の女性が話しかけてきた。

「いや、この絵画展が始まった頃にかかわっていたものですから懐かしくて。でも、ずいぶん昔のことです。」

「そうなんですか」

　今年はポエム絵画展３０周年だという。そんなに長い年月が経ったのか。この絵画展は多くの有志のご支援とご協力を得ながら今を迎えている。

そして、この絵画展を語るにつけ、欠かすことのできない人がいる。

故岩川千年先生である。

岩川先生は福山市内の中学校長を退職の後、旧神辺町教育長を務められた。毎月１回の町内校長会では「終わったらワシに５分ほど話させてくれんかのう。」と言われ「ワシは町内の全部の学校に茶山の絵を描かせたいんじゃ」と繰り返しおっしゃっていた。

その頃（平成４年）「まんが神辺の歴史」が発刊され、著者の中山善照氏による茶山詩の紹介があった。原文から読み下し文、そして子ども向けの訳詩には心和む絵が添えられていた。今、子どもたちが画題にしている「茶山ポエム」がここに生まれたのである。さらに年を追って画題は増え、子どもたちはより多くの選択肢から豊かなイメージを膨らませるようになった。

ある時私は岩川先生に尋ねた。

「先生は教育長を退任されたあと何をされますか？」

「そりゃポエムよう、あんたが退職したら、手伝うてくれんかのう」

私が定年を迎えるとすぐに、先生が拙宅に来られた。「これからお金をもらいに行くから一緒に来てくれ

え、あんたは領収書を書いてくれえ」

町内の医院、歯科医院をくまなく回って寄付を募ると言う。医院の窓口に行くと

「ちょっと先生にお会いしたいんですが…」

「先生は今、診察中ですが…」

「そこをちょっと…」

何事かと出てきた医師に当顕彰会会長高橋孝一氏の名による趣意書を手渡し、患者を待たせて説明する。まだゴム印も角印も作っていない。交渉が成立すると領収書づくり。手書きで「菅茶山先生遺芳顕彰会」（当時の正式名称）渡辺慧明 印。大急ぎで書いて渡すのが私の役目でした。その強引さにあきれながらも岩川先生の強烈な意欲と情熱に圧倒される思いでした。

こうして先生自らが体を張って集められた貴重な資金をもとに町内６小学校１年から６年生まで全員、一部保育所、幼稚園、中学校からの応募も加わり、菅茶山記念館展、医院・歯科医院展、町並み格子戸展、やがては福山市役所ロビー展と発展して行った。

栄枯盛衰、茶山ポエム絵画展も我々民間団体の手を離れ、運営を公的機関に委ねるようになりましたが、播かれた種が大きく育った今、かつてそれを描いた子どもたちが立派に成長し、社会の担い手として活躍している姿を思うにつけ、一入の感慨を覚えるとともに、これから先も神辺に育ち神辺をふるさととする人たちの幼い日の思い出として深く心に留まることを願うこの頃である。

